

千葉県銚子市（国内 43 例目）の高病原性鳥インフルエンザ発生農場に係る
疫学調査チームの現地調査概要

令和 7 年 1 月 24 日に実施した現地調査により、以下のことを確認した。

1 基本情報

用途（飼養羽数）：採卵鶏（約 39 万羽）

発生家きん舎の構造：ウインドウレス鶏舎

発生家きん舎の飼養形態：ケージ飼い（2 階建て直立 8 段ケージ 6 列、通路 4 本）

2 農場の周辺環境・農場概況

- ①当該農場は台地上に位置し、周囲は所有地でない灌木の多い空き地、雑木林、養豚場に囲まれ、公道を挟んだ向かい側には廃豚舎があった。
- ②当該農場はウインドウレスの成鶏舎 4 棟、集卵室、事務所兼更衣室からなり、水の再生処理施設、死亡鶏の焼却炉が設置されていた。また、鶏舎は農場の東西に並んでおり、農場北側には系列の肥料工場が隣接していた。発生鶏舎は最も東に位置する 1 号鶏舎であった。
- ③成鶏舎は 2 階建てで、各棟は隔壁で 2 鶏舎に区分されていたが、鶏舎毎に出入口が設置されており、内部での鶏舎間の移動はできない構造だった。発生時、8 鶏舎全てで採卵鶏が飼養されており、発生が確認されたのは最も東側に位置する 1 号鶏舎の 1 階部分であった。
- ④当該農場の周辺では、本年 1 月中旬以降、本病の発生が複数例確認されており、当該農場の北約 400～700m には、国内 37, 38 例目（千葉県 6, 7 例目）の発生農場が存在している。

3 通報の経緯・発生時の状況

- ① 管理者によると、発生鶏舎（約 5 万羽、通報時 386 日齢）では 1 日あたりの死亡羽数が通常数羽であったところ、1 月 23 日の朝の健康観察時に、東側から 4 列目の下から 4 段目（1 階の一番上の段）、中央から少し奥側の 1 ケージ内で 5 羽がまとまって死亡していたため、家畜保健衛生所に通報した。発生ケージ以外では異状を認めず、同日の夕方に状況を確認した時も死亡の拡大はなかったとのこと。
- ②現地調査時、発生ケージの鶏は全て死亡していた。発生ケージの隣接ケージの鶏は生存しており、目立った異状は認めなかった。その他の鶏舎の鶏に異状は認めなかった。

4 管理者及び従業員

- ①当該農場では正規職員 5 名、派遣職員 3 名、パート 2 名が勤務しており、鶏舎内の作業は正規職員 5 名、パート 1 名の計 6 名で実施していた。
- ②鶏舎毎の担当者は固定されておらず、日ごとに担当鶏舎を決めていた。

5 農場の飼養衛生管理

- ①公道と接する衛生管理区域境界線上にフェンス等はなく、農場内には消石灰が散布されていた。なお周辺での HPAI 発生を受け、農場内への消石灰の散布回数を増やし、薄くなってきたらすぐに追加で撒くようにしていたとのこと。更衣室及び車両消毒ゲートは衛生管理区域境界上に設置され、更衣室の入口には関係者以外立入禁止の看板が貼られていた。また、隣接する系列の肥料

工場の境界はロープ又は肥料工場の鶏糞置場の壁で仕切られていた。

- ②車両消毒ゲートは上下左右から消毒薬（逆性石けん）が噴霧され、車両の底部も消毒可能であった。車両消毒ゲートには一時停止の看板が設置されており、管理者によると、来場車両はゲート前の消石灰帯で一時停止後、ワンウェイ方式となっている来場者用更衣室で来場者記録簿への記帳、更衣、長靴交換、手指消毒を行った後、車両消毒ゲートを通過して場内に進入していたとのこと。
- ③従業員はワンウェイ式の従業員用更衣室で更衣、長靴交換、手指消毒を行ってから入場していたとのこと。また、鶏舎に入る際は、鶏舎入口において、踏込消毒（塩素系消毒薬）後、すのこを挟んで鶏舎内専用長靴に交換し、鶏舎作業用手袋の着用を行っていたとのこと。
- ④鶏舎はモニター屋根部及び鶏舎平側の外壁上部にある入気口（南西又は北東に面する）から入気し、鶏舎平側内壁上部のインレットから鶏舎内に給気し、鶏舎入口と逆の妻側（北西に面する）に設置されたファンから排気していた。インレットは温度で自動制御されとのこと。鶏舎妻面手前側の入気面は、冬季は内側からパネルで閉鎖されていた。モニター屋根及び鶏舎側面の入気口並びにファンの内側には金網が設置されていた。
- ⑤鶏舎内には糞乾パイプが設置されており、鶏舎の天井裏に入気装置が設置されていた。発生時は外気入気を行っておらず、内気循環させていた。
- ⑥飼料は鶏舎毎に設置された飼料タンクから、鶏舎外に設置された飼料計量室を経て、配管を通じて鶏舎内に供給され、自動で給餌される構造となっていた。飼料計量室の計量器のホッパーには蓋がされており、飼料計量室内にネズミ等の野生動物の痕跡は認めなかった。
- ⑦給与水は、全量、衛生管理区域内の水の再生処理施設内で処理された再生水を利用していた。
- ⑧集卵は集卵ベルト及びコンベアで行われ、鶏舎外のコンベアの上部はカバーで覆われていたが、底部に金網等は認められなかった。鶏舎との接続部は隙間がなく、集卵時以外は集卵室に入る部分のみ手動のシャッターで隙間をふさいでいたとのこと。
- ⑨鶏糞は除糞ベルトにより搬出されたあと、除糞コンベアで農場に隣接する系列の肥料工場の鶏糞置場に週2回の頻度で搬出され、同施設内で堆肥化处理されていた。鶏舎外を走行する除糞コンベアの上部はカバーで覆われていた。また、鶏舎内の除糞ベルトから除糞コンベアへの落とし口には蓋がされていた。
- ⑩死亡鶏は鶏舎内の出口付近に置かれた専用バケツに一時保管し、一日の作業の終了後に蓋付きの一輪車で焼却炉まで運び、焼却処理していたとのこと。廃棄卵は、当該農場と肥料工場の間の壁に設置された小窓を通して、肥料工場内の鶏糞置場に投入していたとのこと。
- ⑪当該農場では、鶏舎毎のオールインオールアウトを実施しており、約40日の空舎期間を設け鶏舎内洗浄・消毒を行っていた。

6 野鳥・野生動物対策

- ①管理者によると、肥料工場付近を中心に普段からカラスの群れを見ることがある。なお、周辺農場におけるHPAI発生後は少し減ったように感じたとのこと。また、農場内ではセキレイやスズメ等を見かけるとのこと。調査時、鶏舎と鶏舎の間の敷地でカラス、スズメ、セキレイを見かけたほか、農場の東側の空き地の木に多くの中型の野鳥を確認した。また、隣接する肥料工場の鶏糞置場には防鳥ネットが設置されていたが、内部にセキレイやカラスが侵入し

ているのを確認した。

- ②管理者によると、農場付近でイノシシを目撃したことがあるとのこと。ネコは見るたびに追い返しており、最近ほとんど見ていないとのこと。
- ③外部業者によるネズミ対策を月1回実施しており、調査時も明確なラットサインは認めなかった。管理者が勤務した3年半の間で、2024年夏に一度捕獲された以外、ネズミを確認したことはないとのこと。
- ④発生鶏舎に野生動物が侵入できそうな間隙は認めなかった。

(以上)